

「ネイティブ・アメリカンの逆襲」

ブルース・L・バートン

1999.9.22 放送

アメリカの人種問題といえば、黒人と白人の人種的対立を思い起こす人も少なくないでしょう。しかしアメリカの人種は何も白人と黒人だけではなく、ラテン・アメリカ系の人も多くいますし、最近ではアジアからの移民も多く見られます。つまりアメリカという国は、典型的な多人種・多民族国家で、単一民族国家と思われがちな日本とは対照的であると言えます。

しかし一方で、アメリカと日本は、人種・民族的な観点から言って一つだけ大きな共通点があります。それは先住民の存在です。アメリカの先住民とは、俗に言う「インディアン」、つまりネイティブ・アメリカンのことで、日本ではアイヌ民族がそれに当たります。ネイティブ・アメリカンがかつて北米大陸全域にわたって住んでいたのに対して、アイヌ民族は、北海道を中心として現在の日本のごく一部にしか住んでいませんでした。しかし両者とも、外部からの侵入者にその土地を奪われて独立性を失い、後に成立する国家社会の中で、少数民族としてかろうじて生き残ったという意味では、同じ悲惨な歴史を辿ってきた民族と言えます。

私の専門は日本史研究なので、どちらかというところ、ネイティブ・アメリカンよりは、アイヌ民族の方に詳しいのですが、今回は、自分の国ということもあって、ネイティブ・アメリカンのことについて少し話したいと思います。

個人的な話で恐縮ですが、私はアメリカ西海岸にあるオレゴン州の出身です。オレゴンは、合衆国の中でも、国家の支配下に入った時期が遅くて、ネイティブ・アメリカンの伝統的な社会が最後まで残った場所の一つです。つまり日本の北海道の状況とよく似ていると言えます。

今から30年ぐらい前、私が小さかった頃のオレゴン州には、ネイティブ・アメリカンの人々が大勢いましたが、私達白人が彼らと接触する機会はありませんでした。それは黒人との関係でよく言われるような差別があったためかもしれませんし、お互いに敬遠していたためかも知れません。しかし何よりも、ネイティブ・アメリカンの多くが、いわゆる保留地、つまりリザーベーションに住んでいて、私達が保留地に出向かないかぎり、物理的に彼らと接触する場がなかったのです。

保留地とは、アメリカの国土拡張の歴史的過程で、ネイティブ・アメリカンに残された最後の土地ですが、具体的にどのようなところでしょうか？インディアンの集落と聞くと、西部劇に出てくるように、地平線まで続く大草原のなかに立つテントの数々を想像する人が多いかと思いますが、今の保留地にはそのような風景はなく、アメリカでよく見られる普通の家や建物が並ぶ町があるだけです。ただ、私が昔知っていた保留地には貧しい人達が多くて、町自体が何となく廃れた雰囲気になっていました。これは言うまでもなく、ネ

イティブ・アメリカンの伝統的社会を破壊して、生き残った人々を保留地に追い込んだ白人のせいに他なりません。しかし私は若いころ、そのことについてあまり深く考えたことはありませんでした。

私は 21 歳のときにオレゴンを出て別の州の大学院に行くことになり、後に日本の大学で就職することになりました。歴史研究をやっているものとして、ネイティブ・アメリカンについても多少は学んできましたが、日本に住んでいることもあって、「ネイティブ・アメリカンとはこういう人達なんだ」と実感するような機会は、この 20 年近くありませんでした。

ところが、最近出張などでアメリカに行く機会が増え、年に 1, 2 回のペースで故郷のオレゴンを訪れるようになりました。そこで気がついたのですが、オレゴンで何がいちばん変わったかといえば、昔はさびれていたように見えたネイティブ・アメリカンの保留地が、今では活気あふれる町にその姿を変えているということです。その理由はいたって簡単。何と、保留地の中に大きなカジノが建ち、繁盛しているのです。実は、この現象は、オレゴンだけではなく全国的な規模で起きているそうです。私の子供の頃にはまったく考えられなかったことです。

ここで少し説明を補足しましょう。アメリカでは、ラスベガスやアトランティックシティなど、カジノで有名な町もありますが、一般的に言えば、ギャンブル、つまり賭け事に対する規制が厳しくて、カジノを建てることはほとんどの州で法律によって禁じられています。オレゴン州ももちろんそうです。ではその禁止されているはずのカジノを、なぜネイティブ・アメリカン達が保留地の中で公然と作ることが出来るのでしょうか？

その理由は、保留地という場所の、特殊性にあります。ネイティブ・アメリカンはもともと、アメリカ合衆国によって土地を奪われた結果として保留地に押し込められてきたのですが、その保留地は同時に、合衆国の主権や法律がそう簡単には及ばない、一種の自治地区にもなっています。つまり、国や州の法律で禁じられていることでも、場合によっては保留地で許可されることがあるのです。

ネイティブ・アメリカンの人達が保留地内における自治の権利を主張するのは当然で、ギャンブルに関しても、アメリカの議会が 10 年ほど前にその正当性を認めました。その法案が通った直後に、全米各地の保留地でネイティブ・アメリカン達がカジノを建て始めました。今ではカジノが全国に 300 ヶ所以上あって、毎年の売り上げは合わせて約一兆円にもなります。直接に儲けているのは経営者のネイティブ・アメリカン達ですが、周辺地域全体に対する経済効果も大きく、徴収される税金も州政府などの財政に貢献しています。

このように繁盛しているカジノですが、その存在をめぐって賛否両論があります。ネイティブ・アメリカンの中にも、カジノの経済効果は認める一方で、そうしたものを作ること自体が、白人の価値観を受け入れることで、ネイティブ・アメリカンの伝統社会に悪い影響を及ぼすと、反対している人もいます。

また、白人の態度にも興味深いものがあります。街角で聞くと、多くの白人は、ネイテ

ィブ・アメリカンが経営するカジノに対して否定的な意見を述べます。「どうしてインディアンだけにカジノを建てるのが許されるのだ。不公平だ」と言うわけです。

しかしそういう白人自身も、カジノによく足を運びます。実は、私も先日オレゴンに帰ったときに、後学のために保留地のカジノに入ってみました。従業員が主にネイティブ・アメリカン系だったのに対して、客はほとんど白人でした。

考えてみればこれは何とも皮肉な風景ではないでしょうか？ネイティブ・アメリカンはその昔、心無い白人にだまされ、本来知らなかった酒やその他の悪習を覚え、社会は崩壊させられてきました。しかし、カジノに関する限り、この立場が今逆転しています。ネイティブ・アメリカンは、ギャンブルを利用して白人をうまく操り、儲けているからです。何とも興味深い、いや痛快なことではないでしょうか。

色々な意見がありそうですが、私はネイティブ・アメリカン経営のカジノを100パーセント支持したいと思います。白人に抑圧されて社会的弱者になったネイティブ・アメリカンは、今や、暴力ではなく合法的な手段で自らの立場を再構築しようとしています。これは評価できることではないでしょうか？また、遅まきながらも彼らの主張を認めたアメリカの政府や国民にも、一応は拍手を送るべきでしょう。保留地のカジノに問題がないわけではないですが、その設立をきっかけに、ネイティブ・アメリカン達は自らが味わってきた悲惨な歴史のつけを、今少しずつ取り返しているような気がします。

では。